

地震・津波・原発 —科学技術社会論の観点から見る課題—

標葉 隆馬

(総合研究大学院大学先導科学研究科 助教)

2011年3月11日に発生した大震災とそれに続く原子力発電所事故は、社会・経済に多方面且つ甚大な影響をもたらしたと同時に、「科学と社会」を巡る議論に対しても多くの課題を投げかけた。その課題群の検討には、科学者や原子力の専門家に限らず、人文・社会科学や政策の専門家、科学コミュニケーションまで含めた多様なアクターの参加が望まれる。しかし、その一方で、現在までに多くの論点を含むが故の混乱も生じつつあり、議論の交通整理と実証的な分析の提示が求められる段階に入りつつあると見られる。このような展開を踏まえ、科学技術社会論（STS）は今回の災害からどのような記述と教訓を引き出し、今後の反省に結び付けていくことが出来るだろうか。これが、本発表において検討したいテーマである。そのための足掛かりとして、本発表では、以下のようなテーマに注目した議論の整理と提案を試みる。

- 地震・津波・原発を巡るリスク社会論—複合的災害における科学的・社会的経済的リスクの不平等と社会構造—
- 科学コミュニケーションとリスクコミュニケーション—現状と役割—
- 科学技術政策と科学技術ガバナンス—「モノ」と「システム」／「コミュニティ」の関わり—
- 複合的災害における「情報」—トピックス・特徴・メディア—

また、これらの論点の整理過程において、プリミティブな段階ではあるが、現在取り組んでいる分析の結果についての紹介も行う。